

要旨

【目的】

現任教育におけるいじめを体験した新人看護師の理解を深めることを目的に、その新人看護師が周囲の人や指導とどのような関わりをもって、新人時代を過ごしてきたかを記述した。また、その体験を基に、新人看護師教育の問題点及びいじめの予防対策と発生時の支援体制を考えることを目的とした。

【方法】

本研究は、現象学的アプローチを用いた質的記述的研究である。新人時代に現任教育におけるいじめを体験した看護師国家資格取得後 2 年目の看護師 5 名を対象に半構成的インタビューを行い、データを収集した。また、研究協力者には、事前に「職場のいじめ調査票：NAQ-R 日本語版」を実施してもらい、新人時代にいじめを受けていたかの客観的妥当性を得た。インタビューは 50～90 分／回を 2 回実施した。その後、インタビュー結果を Colaizzi の方法を用いて分析した。※本研究は聖路加国際大学倫理審査委員会に研究計画書を提出し、審査を受けた後に実施した。（聖路加国際大学 研究倫理審査委員会 承認番号：16-A003）

【結果】

本研究では、新人時代に現任教育におけるいじめを体験した 5 名の語りを経て、その体験を記述した。その結果、新人看護師は期待していた指導と実際の指導との違いに戸惑い、その中で指導者から「ひどい指導」「『理不尽』なもの」「『価値観』を押し付けるような態度」「感情が入った指導」といった指導の域を超えた何かを受け辛い日々を送っていた。さらに、そのような指導を受けている自分自身に違和感や孤独を覚え、信頼できる人に相談していた。新人看護師は様々な人との関わりの中で、次第に自分がいじめの被害者だと認識し、信頼できる相談相手と共に現状打破に向けて歩みを進めていた。それは、辞職や異動など新しい世界へと踏み出すことであったり、今ある環境の中で何かしらの希望を見出すことであつた。しかし、どのような場合であっても、その新人看護師はその後もしじめられた時のトラウマに苦しむ日々を送っていた。

【結論】

現任教育におけるいじめを受けた新人看護師は、【いじめか指導かわからず】【自分の存在価値・意味】を問い、【社会的制約に苦悩】するといった共通の体験をしていた。また、現任教育におけるいじめは、新人看護師が【一人前の看護師へと成長する過程を阻害】し、さらに【他者から指導を受けることへの恐怖】を抱かせていた。

現任教育におけるいじめを予防するには、職場いじめの認識を高めて指導の域を超えたいじめの早期発見・早期解決に努めること、いじめの相談窓口を病院内外に確保すること、新人看護師のレベルに応じた指導方法を身に着けた臨床看護教育者の育成に力を入れることが重要だと考えられた。